

相模国分寺跡(海老名市)

海老名駅を降りると、駅前に七重塔のモニュメントが建っていた





説明板に大岡實の名がみえる/実物大の約三分の一のスケールらしい

海老名市観光シンボルモニュメント

七重の塔

七重塔は、七四一（天平十三）年 聖武天皇の「国分寺建立の詔」をうけて建立された相模国分寺の伽藍の一つです。

国分寺の塔には、国家の平和を祈る金光明嚴王経が安置されていました。過去2回行なわれた発掘調査によると基壇（建物の基礎となる土壇）は、一辺の長さが二〇・四m、高さは一・三mの規模で、残存する礎石から塔の初重の広さは一〇・八m四方、塔の高さは六五mにも及ぶものであったと推定されています。

また、基壇周辺で発掘された石敷や盛り土から、2回の修理もしくは建て替えが行われたことも分りました。

この塔は、海老名市観光協会が、故大岡實氏の復元図を基に実物大の約三分の一のスケールで建設したモニュメントであります。

平成四年十二月竣工

海老名市観光協会

防犯

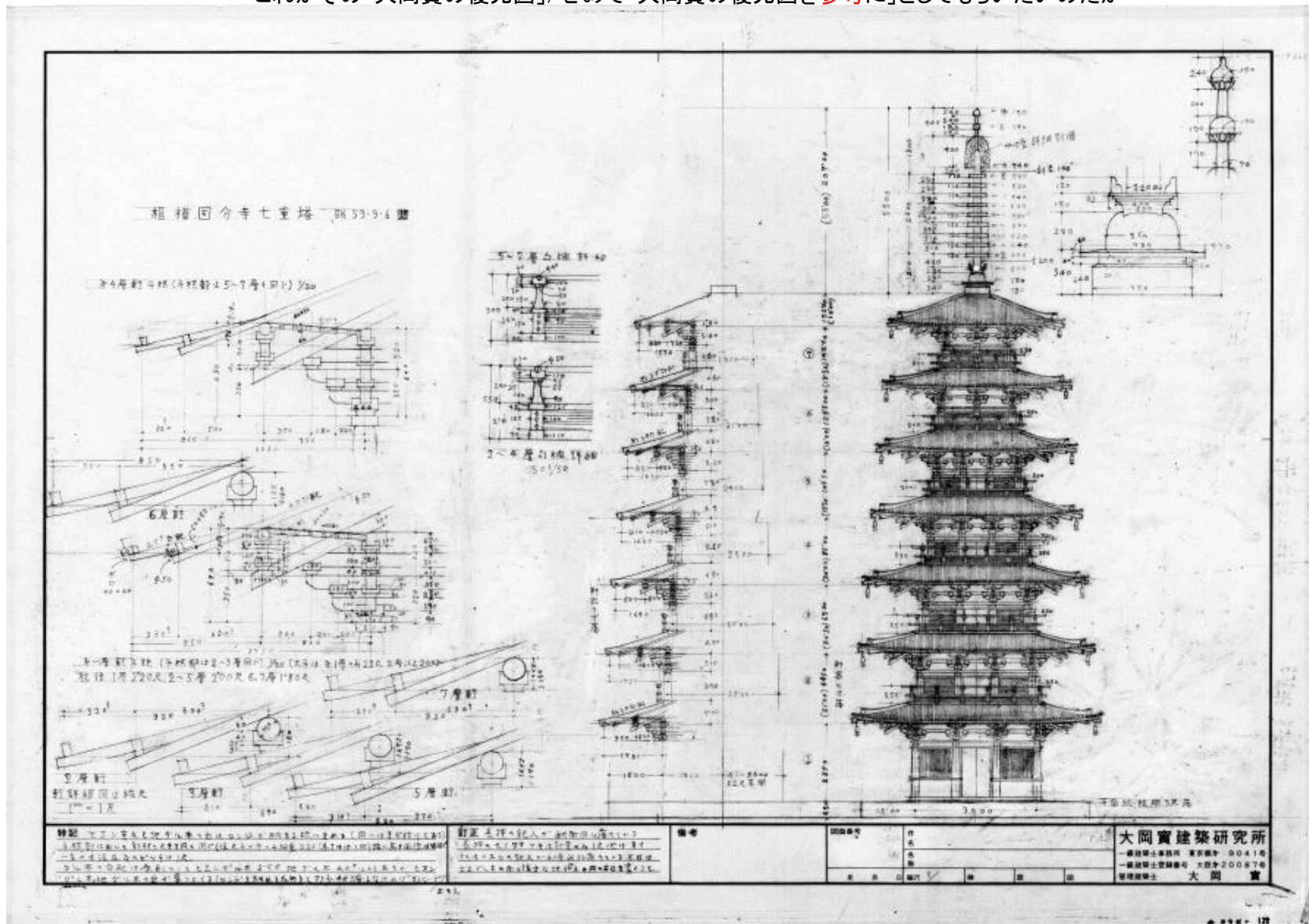
「観光シンボルモニュメント」ということであるが、「大岡實の復元図を基に」と記されてしまっている



「復元図」は確かに大岡實が作成したのだが、断りなしに、そして「復元図」とはほど遠い質の低い建物が建てられてしまっている



これがその「大岡實の復元図」/せめて「大岡實の復元図を参考に」としてもらいたいのだが



さて、「現在地」から②相模国分寺跡→①温故館→⑤相模国分尼寺跡→③国分寺→④海老名の大ケヤキを巡ろう



相模国分寺跡

相模国分寺跡/歴史公園となっている

しせき さがみ こくぶん じあと 史跡相模国分寺跡歴史公園案内板

ここは、奈良時代に造られた国指定史跡相模国分寺跡です。地中の史跡遺構を壊さない範囲で利用できる広場です。

史跡相模国分寺跡とは

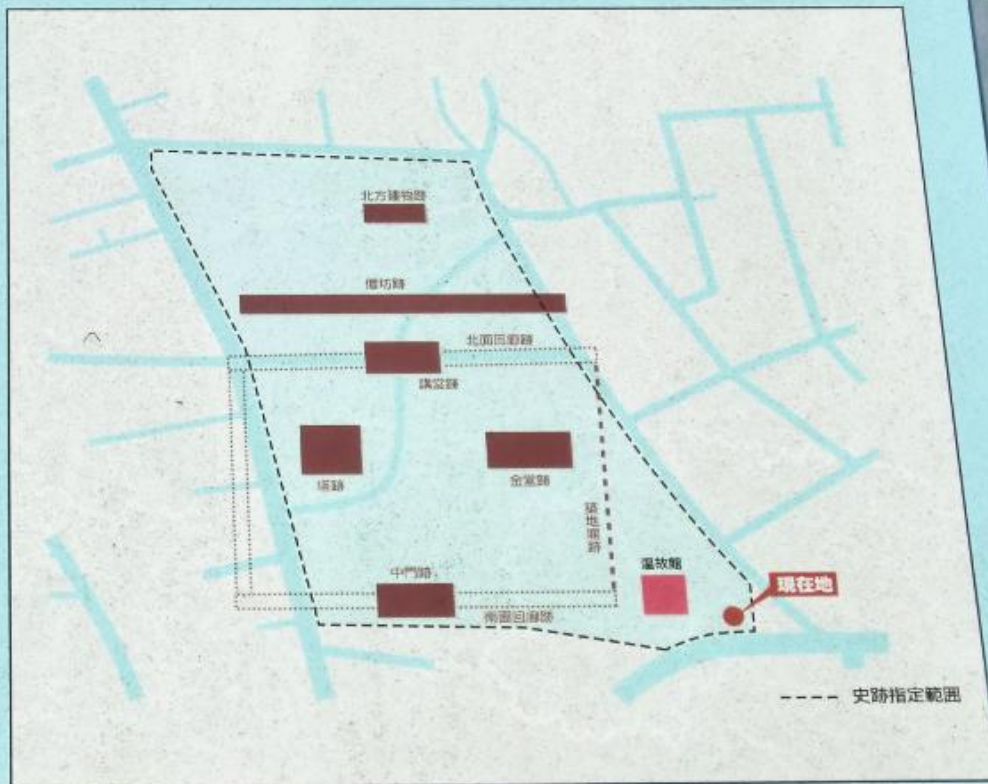
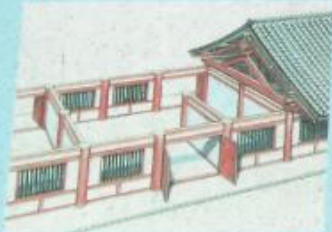
相模国分寺跡は、天平13(741)年に聖武天皇の詔によって諸国につくられた国分寺の1つです。

相模では、発掘調査や出土遺物の分析によって8世紀後半には創建されていたことが分かっています。



↑七重塔イメージ図

↓備坊建物イメージ図



ここにも説明板が立っている/後ろが歴史公園



国指定史跡

相模国分寺跡

大正十年三月三日指定

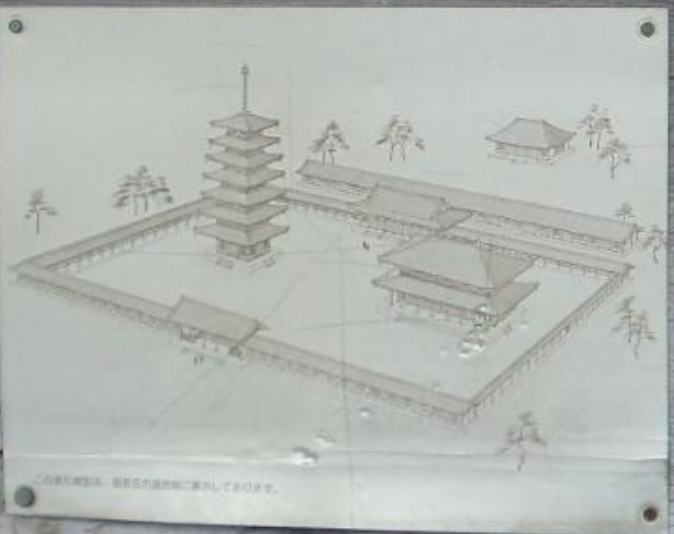
七四一（天平一三）年に全国に国分寺建立の詔がくだされ、相模国では海老名のこの地に建てられた。

相模国分寺の伽藍は、塔と金堂が東西に並び、その北側に講堂が配置される法隆寺式である。講堂の北には僧坊・北方建物が配置され、諸国国分寺の中でも武蔵・陸奥と並んで全国最大規模クラスである。

文献では相模国分寺は八一八（弘仁一〇）年に二回炎上し、八七八（元慶二）年に地震にあり焼失したとして、一九六六（昭和四一）年の発掘調査で焼失後に再建されていることが確認された。

平成三年三月

海老名市教育委員会



相模国分寺跡 発掘調査で明らかになった様子

また、こちらにも説明板があった/右手の基壇は「塔跡」



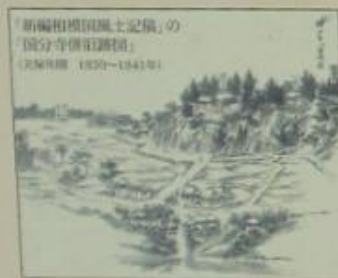
史跡相模国分寺跡環境整備事業

相模国分寺は、741年(天平13)の「国分寺建立の詔」によって全国に建立された寺院の一つです。

819年(弘仁10)と878年(元慶2)に相模国分寺が被災したという記録が残っていますが、940年(天慶3)には相模国分寺の仏像が汗をかいたという記録があることや発掘調査の結果等から、平安時代中頃までは修理や再建が行われていたようです。

しかし、平安時代後期には荒れ果て、やがて現在の国分寺の場所に移転したといわれています。

相模国分寺跡は、江戸時代に書かれた「新編相模国風土記稿」の挿し絵にも遺跡が描かれているほど古くから知られていました。



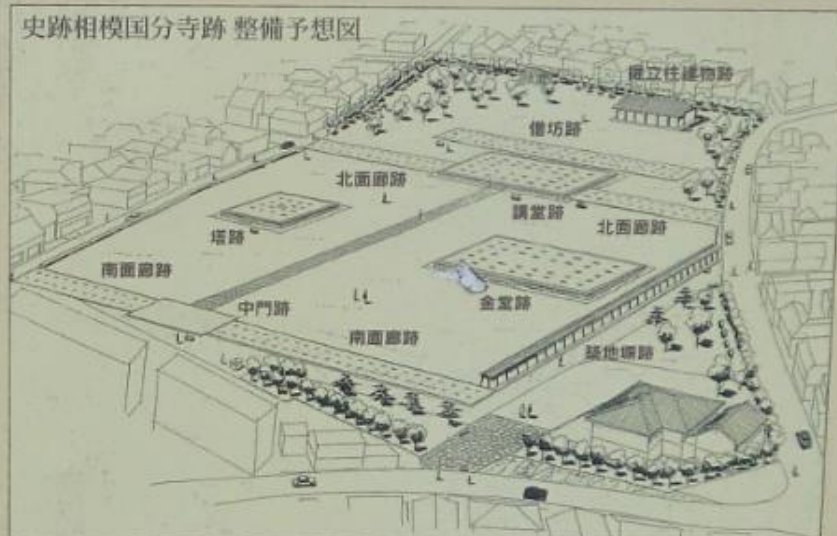
明治時代後半から大正時代にかけて尋常高等海老名小学校(現在市立海老名小学校)の校長であった中山毎吉が相模国分寺跡や国分尼寺跡などの遺跡を調査して、矢後駒吉とともに「相模国分寺志」という研究書にまとめました。

こうした中山毎吉等の調査研究や保存運動により1921年(大正10)3月3日に相模国分寺跡は「国指定史跡」となりました。

海老名市では貴重な文化遺産である史跡相模国分寺跡を現状のまま保存するだけでなく、復原・整備をする環境整備事業を平成元年度(1989)から始めました。

明治時代後半から大正時代にかけて尋常高等海老名小学校(現在市立海老名小学校)の校長であった中山毎吉が相模国分寺跡や国分尼寺跡などの遺跡を調査して、矢後駒吉とともに「相模国分寺志」という研究書にまとめました。

こうした中山毎吉等の調査研究や



1966~67年(昭和41~42)の発掘調査結果をもとに、1990~1996年(平成2~8)にかけて塔跡、中門跡、南面廊跡、僧坊跡等の発掘調査を行い、史跡整備に必要な資料をそろえました。

基本的な整備計画は、相模国分寺の創建時の遺構を整備することにしました。具体的には、塔・金堂・講堂の基壇復原、中門・廊跡・僧坊跡等の位置表示を行い、現存する礎石は現位置で保存する計画です。

2000年(平成12)3月
海老名市

○史跡は、みんなの大切な文化遺産です。大切にしましょう。

「中門跡」→「塔跡」→「金堂跡」→「講堂跡」→「僧坊跡」→「北方建物跡1」→「北方建物跡2」の順で回ってみよう/「逆川跡」(水色)は当時人工的に造られた運河跡



「史跡相模国分寺跡 史跡相模国分尼寺跡」/海老名市教育委員会 より

まず、これは南面廊跡と「中門跡」を西側から東方向に見たところ



この幅の広いところが「中門跡」



これは反対に東側から西方向に見たところ/南面廊跡には礎石が出土した位置にレプリカが並べられている



「史蹟 相模國分寺址」と記された標柱と中門跡・南面廊跡の説明板



中門跡・南面廊跡

中門跡・南面廊跡は、1966(昭和41)年と1993(平成5)年に発掘調査が行われました。中門の基壇土は、耕作などで削り取られてほとんど残っていませんでしたが、南面廊との関係から正面20.7m(69尺)、側面10.8m(36尺)の基壇であったと推定されています。

南面廊の西側もすでに遺構面が削られて残っていませんでしたが、東側の調査した範

囲では10個の礎石が旧位置に残っていました。この礎石から南面廊は梁行柱間が5.4m(18尺)桁行柱間が3.0m(10尺)の等間隔になります。また、礎石の上に残る柱の焼失痕から直径約30cm(1尺)の柱であったと推定されています。

発見された廊跡の礎石は、遺構保護のため埋め戻し、同じ位置に河原石を使って再現しました。中門の基壇は、推定範囲を表示してあります。



南面廊跡(平成5年、東から)



南面廊礎石
(平成5年、白線が柱の痕跡)

TYUUMON・KAIROU

KONDOU(Budda Hall) was surrounded by an enclosed corridor, KAIROU. KONDOU, which consisted of Buddhist images, and a tower, was separated from the outside by KAIROU. TYUUMON was the gate, which was established as the entrance, to the inside corridor. An excavation investigation was done in 1966 and 1993. However, a marking of TYUUMON, an entrance gate was not found.

The size of KIDAN, a foundation of TYUUMON, is presumed to be 20.7m east to west, and 10.8m north to south in relation to a corridor mark.

A corridor's pillar (roof support) was found at an interval, of 5.4m north to south and 3.0m east to west, from a discovered corner stone. A buried corner stone of the corridor was preserved.

However, it reappears by placing stone in position with the preserved corner stone.

1998年3月 海老名市
MAR 1998 EBINA CITY

これは「中門跡」から北方向を見たところで左手に「塔跡」、右手に「金堂跡」の基壇が見える



左手の「塔跡」



右手の「金堂跡」



さて、「塔跡」を見てみよう



説明板がある



塔 跡

ここは741(天平13)年の「国分寺建立詔」をうけて建てられた七重塔の跡です。国分寺の塔には、国家の平安を祈る金光明最勝王経が安置されていました。

1966(昭和41)年と1992(平成4)年に行った発掘調査で基壇(建物の基礎となる土盛)は、一辺の長さが20.4m、高さは1.8mの規模であったことが確認されました。残存する礎石から、塔の初重の広さは、10.8m四方で、塔の高さは約65mあったと推定されています。

塔跡のまわりからは屋根瓦(布目瓦)や水煙等の遺物が出土しています。

また、基壇周辺で発掘された石敷や盛り土から2回の修理もしくは建て替えが行われたことも分かりました。

創建時の基壇は、現在復原されているように、四辺ともに切り石積み(増正積)でしたが、後に北側の辺だけが川原石積み(乱石積)につくり替えられています。

石質調査の結果、切り石は相模川上流から、礎石は丹沢方面から運ばれたものと推定され、両方とも凝灰岩質の石です。

10個の礎石は当時のままですが、失われた礎石は国分寺跡から運び出されたといわれる礎石3個と新たな石4個を使って復原・補充しました。

基壇の高さは、基壇周辺の遺構を保護するために盛り土したので、創建時の基壇よりも約35cm低く復原しました。



相模国分寺七重塔想定復原図



発掘された塔跡(平成4年、南上空から)



基礎周辺の石敷(東南部分、東から)



地覆石と延石(南辺、東南から)



金銅製水罐の破片
(塔跡出土)

The "Seven-Layers Tower"

The "Seven-Layers Tower" was built here.

It was one of the buildings of the Sagami-kokubunji-temple.

The Sagami-kokubunji-temple was built in order to pray for peace of the country at the end of the eighth century.

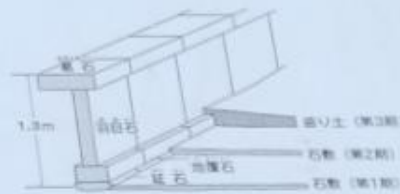
We excavated it in 1966 and 1992. Based on this investigation, we reconstructed the KIDAN (foundation) as it used to be in the old days.

The basic size is 20.4m squared.

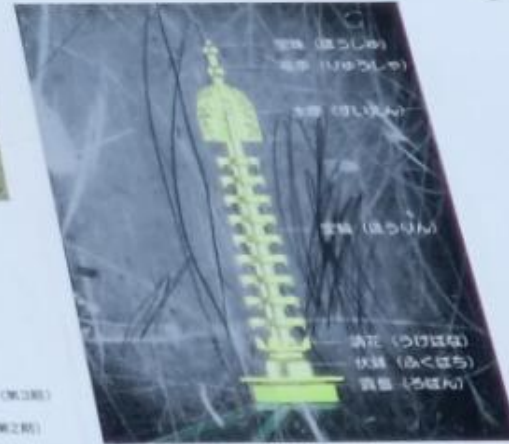
Based on a study, the height of the tower is supposed to be 65m. ,



乱石積(北辺、東から)



壇正積基礎の模式図



塔相輪部分
(相模国分寺模型・部分)

海老名市

東側から見た「塔跡」



雨落溝の区画も見える



これは塔の礎石跡を示す



中央が四点柱跡の礎石と心柱跡の礎石位置



この大きな礎石が心礎跡



「塔跡」から「金堂跡」方向(東方向)を見たところ



さて、前方が「金堂跡」/南側から見たところ/地盤右手は左手から緩やかに上がっており、基壇と地盤との段差が少なくなっている



これは「金堂跡」を西側から東方向に見たところ



「金堂跡」の基壇上には「相模國分寺遺蹟」と記された標柱が立っている



また、礎石の位置も示されている



これは「金堂跡」から「塔跡」方向を見たところ



さて、これは北側の道路を渡ったところにある「講堂跡」の礎石位置を示す/講堂の前半分ほどが道路で破壊されている



これは「講堂跡」の更に北側にある「僧坊跡」



柱や壁の位置が示されている



僧坊跡

僧坊は、国分寺の僧が住んでいた建物です。国分寺建立の詔では、僧は20名が定員とされていました。

国分寺建立の詔の後、塔・金堂・僧坊の早期完成が求められていることから、僧坊が塔や金堂と並ぶ重要な施設であったことが分かります。

僧坊跡は、1966年(昭和41年)の発掘調査で初めて見つかり、1996年(平成8年)の発掘調査により全体的な建物形状などが

確認されました。また、西側半分桁行側で約81m(25間分)、8部屋分が確認されました。

当初は掘立柱式建物でしたが、火災で焼けるなどし、礎石建物に建て替えられたことが分かりました。

一部屋は、桁行が約9.0m(30尺)、梁行が6.57m(22尺)で、部屋の内部に浅い柱穴があり、束柱か間仕切りがあったと推定されます。

柱穴は、直径1.2~1.5mの隅丸方形で、深さは0.8~1.2m、柱を抜き取った痕跡から直径約30cmの柱が建っていたと推定されます。柱穴の底には、柱の沈下を防ぐために石や瓦を敷いたものがありました。

遺構は、地下に埋め戻して保存し、壁があった位置を縦線または横線で、柱があった位置を○で表示しています。



僧坊イメージ図



発掘調査写真



重複している柱穴



柱穴の上に
据え付けられている礎石



柱抜き取り痕のある柱穴



柱あたりに瓦を敷く床柱穴

Site of Priests' Dormitory (sōbō)
at the Sagami Provincial Temple.

Here is the site of priests' dormitory at the Sagami Provincial Temple, which was erected in the late 8th century. The site was archaeologically confirmed in 1966, and large-scale excavations took place in 1996. As a result, the western half of the priests' dormitory was unearthed, where eight quarters were discovered. The size of an individual quarter was 9.00×6.57m. The wooden superstructure of the dormitory was supported by pillars of approximately 30cm in diameter. The pillars were planted into the ground 0.8 to 1.2m in depth.

After the archaeological investigation of 1996, the site is preserved underground. (Ebina City, Kanagawa Prefecture, December 2002)

2002年12月 海老名市

これは更に北側にある「北方建物跡1」/柱の位置が樹木によって示されている





ほったてばしらたてものもと

掘立柱建物跡

この遺構は、1965(昭和40)年の発掘調査で見つかった掘立柱建物跡です。

柱穴の一部が確認され、南側に^{ひさし}庇のつく東西棟の建物です。

この建物の用途は、不明です。

This site was excavation in 1965.
An use of this site is unclear.

2000年3月 海老名市
MAR 2000 EBINA CITY

これはそこから南方向を見たところ/「僧坊跡」の向こうが「講堂跡」や「中門跡」となる



さて、ここは「北方建物跡1」の左手(西側)にある「北方建物跡2」



やはり、柱の位置が樹木によって示されている/西側から東方向を見たところ



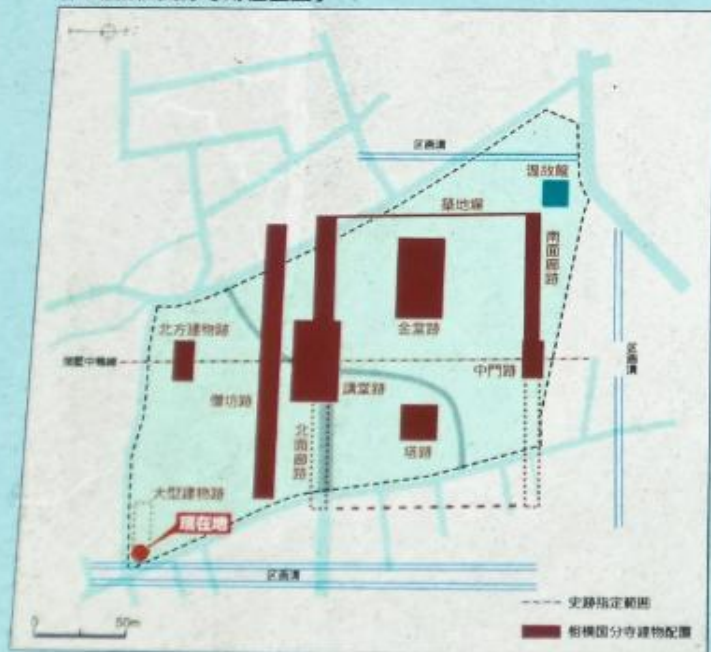
寺域は「区画溝」で区画されていたと記されている

大型建物跡・区画溝

ここは史跡相模国分寺跡の北西部に位置し、平成15・16年度の発掘調査によって、大型建物跡と国分寺の敷地を区画する溝が確認されました。

大型建物跡の坪掘地業が見つかった場所にはツゲを植栽し、区画溝の範囲を舗装により表示しています。

【史跡相模国分寺跡位置図】



■大型建物跡

平成16年度の発掘調査で、桁行(東西)34m以上、梁行(南北)10.5mの大型建物跡と考えられる遺構が出土しました。

大型建物跡は、礎石建ちの遺構で、礎石を据えるために地面を突き固めた坪掘地業の痕跡が11個見つかっています。

このような大型の建物は、全国的に類例が少なく、建物すべてが発掘されていないため、何に使われたかは不明確です。

しかし、位置や構造から、国分寺を運営する様々な機能をもった施設の一部ではないかと推定されます。



大型建物跡発掘調査状況(西側から)

■西側区画溝



西側区画溝発掘調査状況(南から)

発掘調査により国分寺の敷地は、断面逆台形状で、幅約1.2~2.2m、深さ約1.9~3.0mの素掘りの溝によって区画されていたことが確認されました。

西側区画溝は、3条確認され、この場所で見つかった溝は、覆土中から出土した土師器や瓦の破片から創建期(8世紀代)のものと推定されています。

都の寺院では、築地塀などの区画施設が見つっていますが、相模国分寺跡では素掘りの溝のみで、築地塀などの区画施設は見つかりません。

2006年3月 海老名市

温故館

さて、ここは海老名市温故館/寺域の南東隅にあったものが、ここ(西側)に移築された



大正時代の建物



海老名市立郷土資料館 海老名市温故館 (旧海老名村役場庁舎)

この建物は、大正7（1918）年に海老名村役場庁舎として建築されたものを一部移築保存し、復元したものです。

明治22（1889）年の市制・町村制の施行により「海老名村議会」が発足し、国分に「海老名村役場」が設置されました。しかし、明治43（1910）年の国分大火により建物が焼失、業師堂（現・国分寺）の庫裏を仮庁舎としていましたが、大正5（1916）年頃から新庁舎の建築が計画され、大正7年に竣工しました。

木造2階建て、檜瓦葺、外壁は、ドイツ下見張り※注で飾り柱を設け、南正面に切妻造りの玄関ポーチがありました。

柱には特徴的な柱頭飾り、玄関ポーチにはパージボードと呼ばれる飾り破風、垂飾り、装飾的な方杖が取り付けられ全体として直線的で素朴な装飾の建物となっていました。

この建築様式は、郡役所様式と呼ばれるもので明治から大正時代にかけて役所などによく用いられ、海老名村国分の大工・藤井熊太郎が棟梁となって建築されました。

外観を洋風建築とする一方で、小屋組みや土台、軸組などは日本古来の建築を踏襲した和洋折衷の建物でした。



大正7年



昭和57年

※注：増築部分は、南見張りでした。移築後は全面ドイツ下見張りとなっています。



昭和32年



大正期



周辺案内図

●利用案内●

開館時間 9:00～17:15（入館は16:45まで）

休館日 年末年始（12月29日～1月3日）

※展示入替などで臨時休館することがあります。

所在地 神奈川県海老名市国分南一丁目6番36号

※入館される方は、次の事項を守ってください。

- (1) 郷土資料館の資料及び施設等を損傷し、又は滅失しないこと
- (2) 資料の模写、複製及び写真撮影を許可なく行わないこと
- (3) 他人の迷惑となるような行為をしないこと
- (4) その他郷土資料館の職員が指示する行為をしないこと

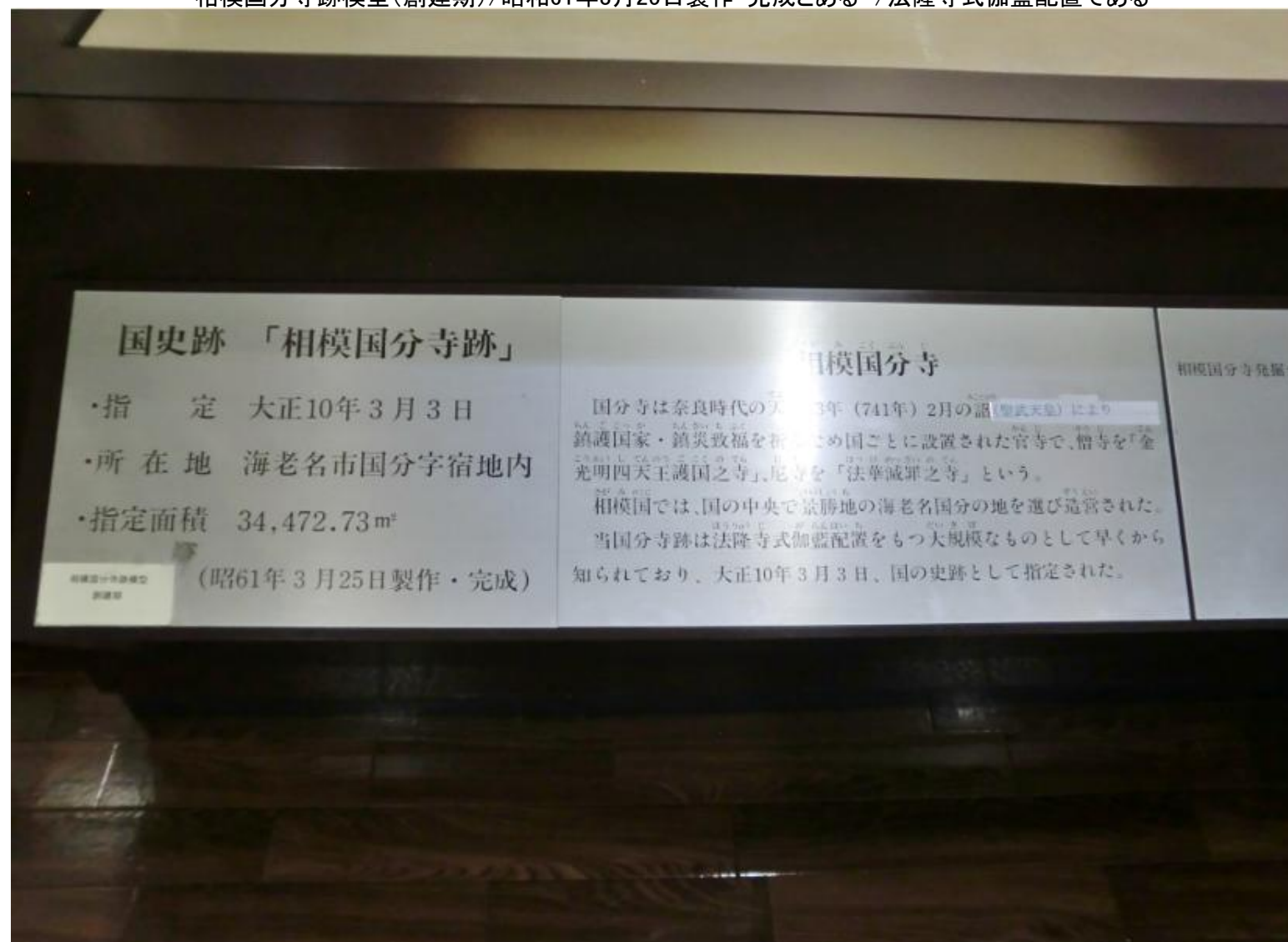
※次に該当する場合は、入館をお断りすることや連絡していただくことがあります。

- (1) 他人に危害又は迷惑を及ぼすおそれがあると認められる方
- (2) 郷土資料館の資料並びに施設及び設備を損傷し、又は滅失するおそれがあると認められる方
- (3) その他管理上支障があると認められる方

館内に展示されていた創建期の相模国分寺跡の模型(縮尺/百分の一)/大岡實の設計に基づく



相模国分寺跡模型(創建期)/昭和61年3月25日製作・完成とある /法隆寺式伽藍配置である





伽藍は周囲を回廊が巡るが、金堂側(東側)は地盤が高くなっているためか、東側だけは築地塀となっていたらしい

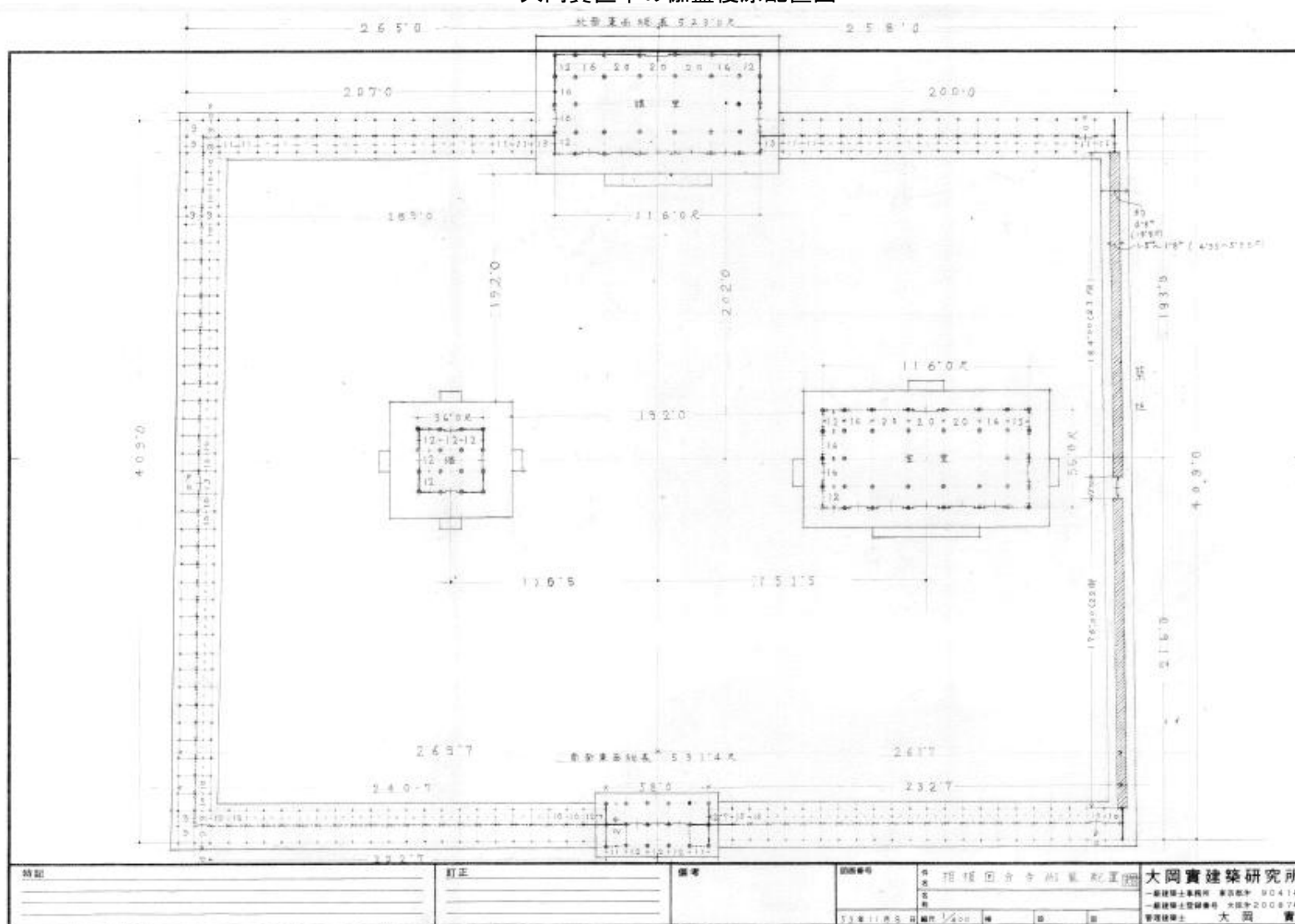


こんな感じ



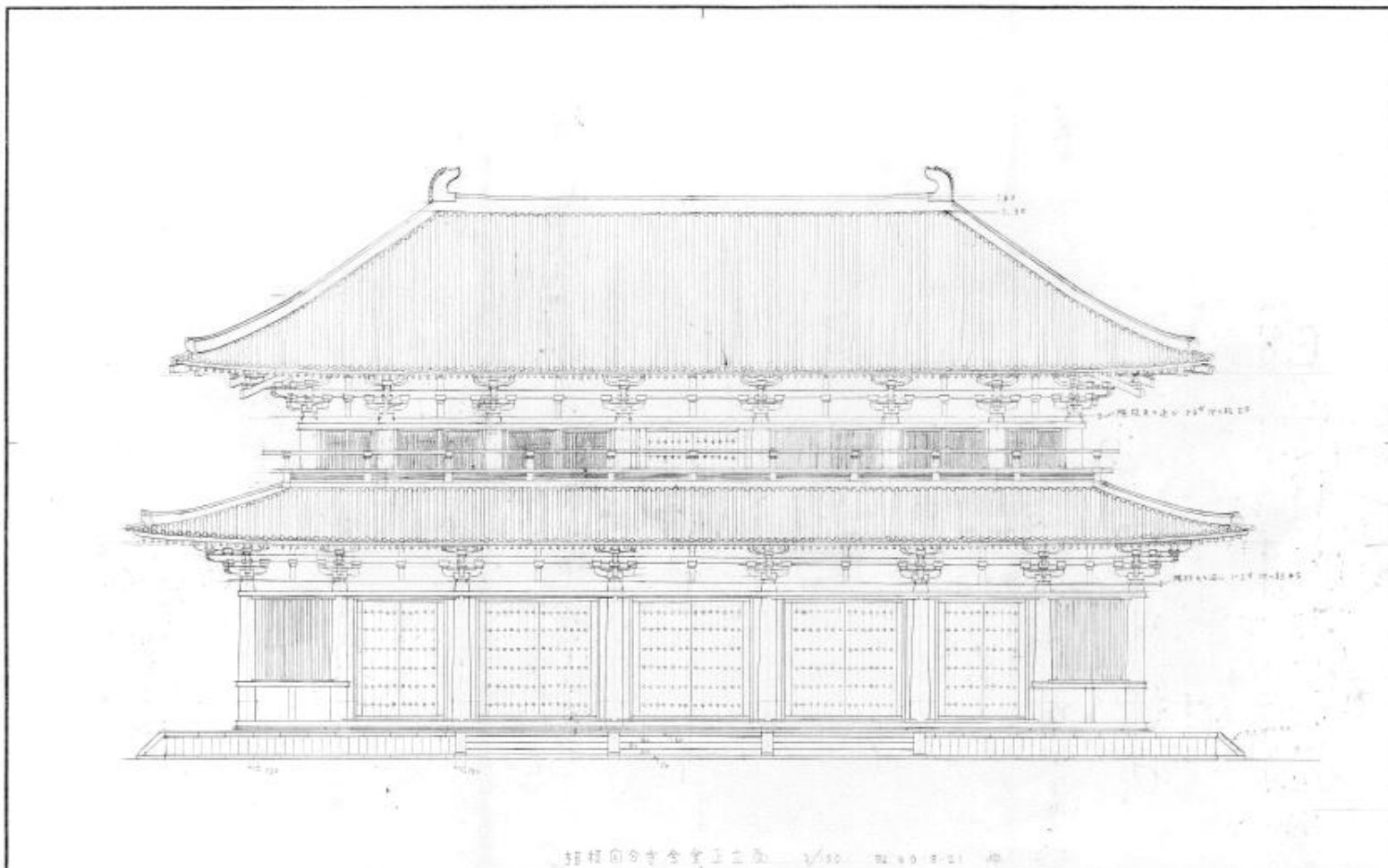


大岡實直筆の伽藍復原配置図



特記	訂正	備考	図面番号	大岡實建築研究所
			大岡實建築研究所 東京支所 50414	
			大岡實建築研究所 大阪支所 20087	
			管理棟 大岡 實	

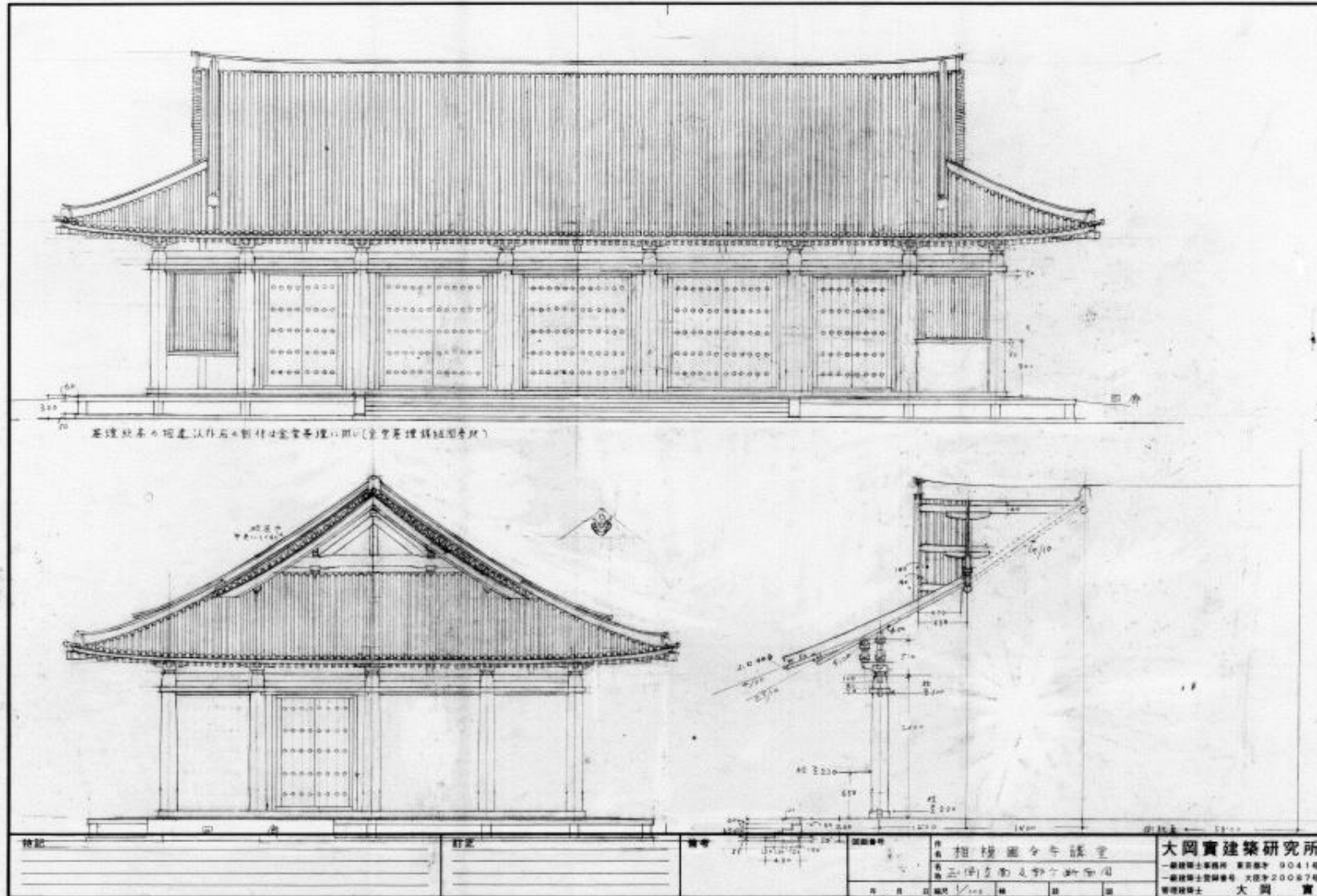
金堂復元図



招提園金堂全堂正立面 1/50 昭和40年8月21日

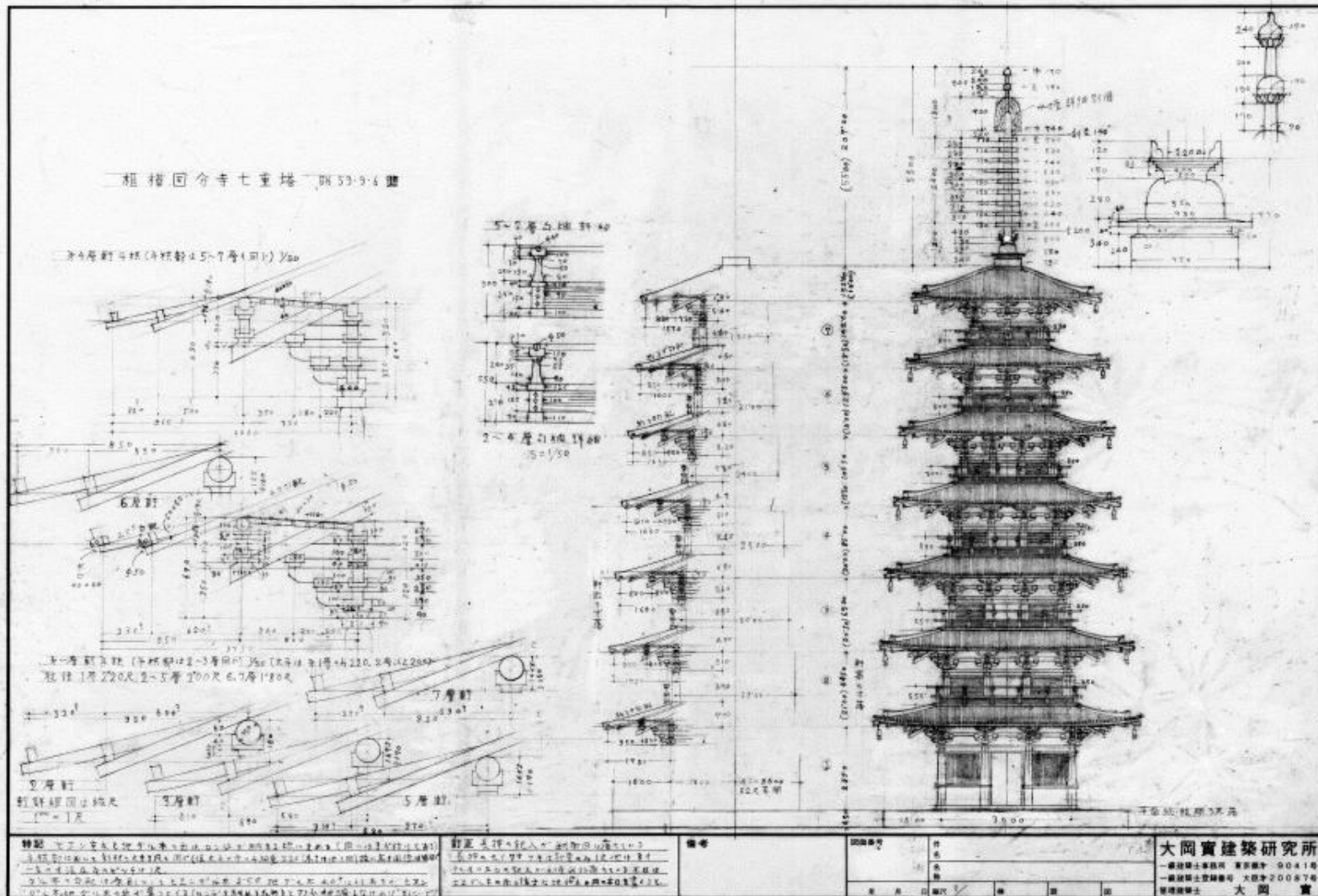
<p>特記</p>	<p>訂正</p>	<p>備考</p>	<p>図面番号</p>	<p>大岡實建築研究所 一級建築士事務所 東京都 9041号 一級建築士事務所 大阪府 20087号 管理建築士 大岡 實</p>
-----------	-----------	-----------	-------------	--

講堂復元圖



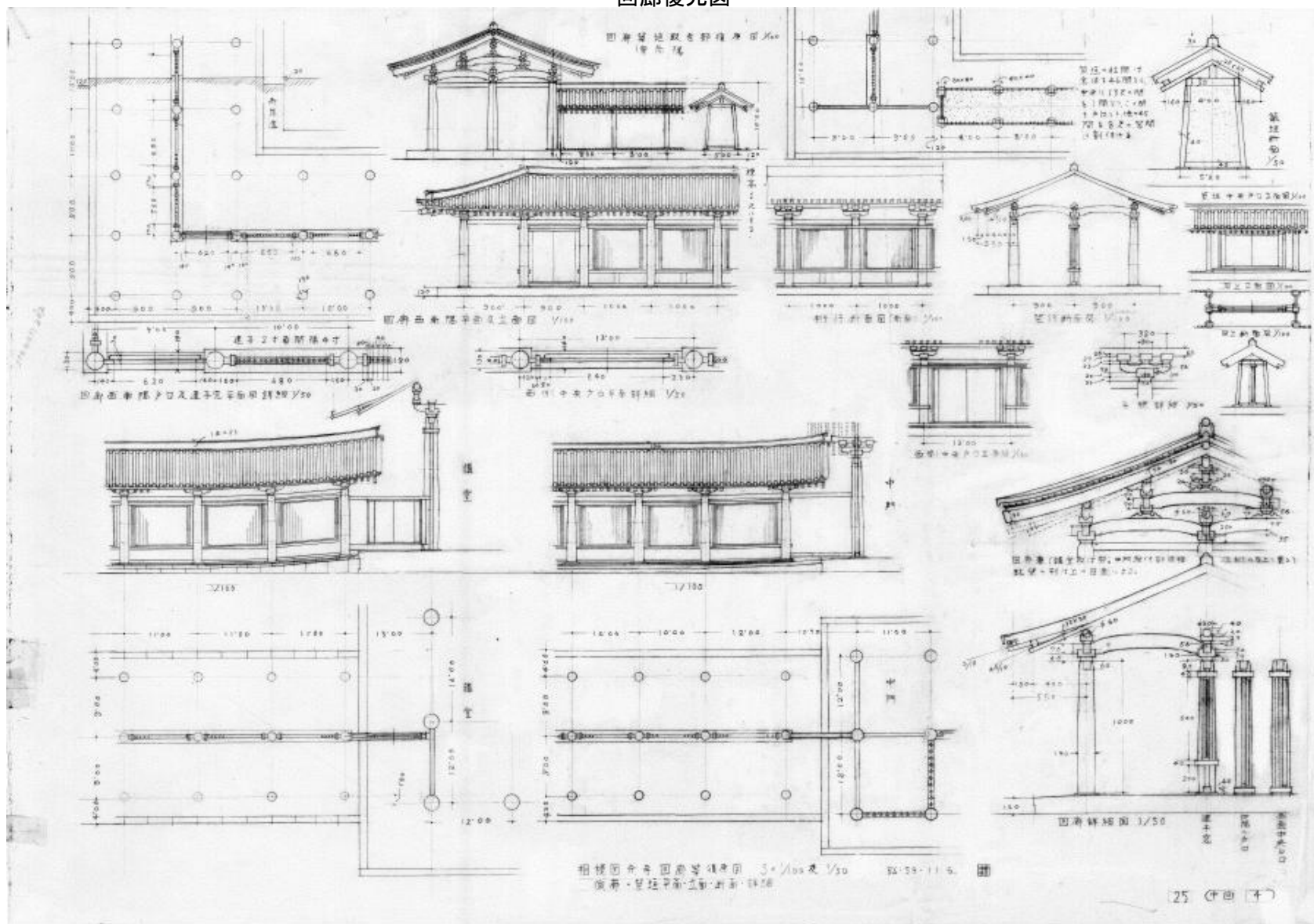
11.6 (續 2)

七重塔復元図

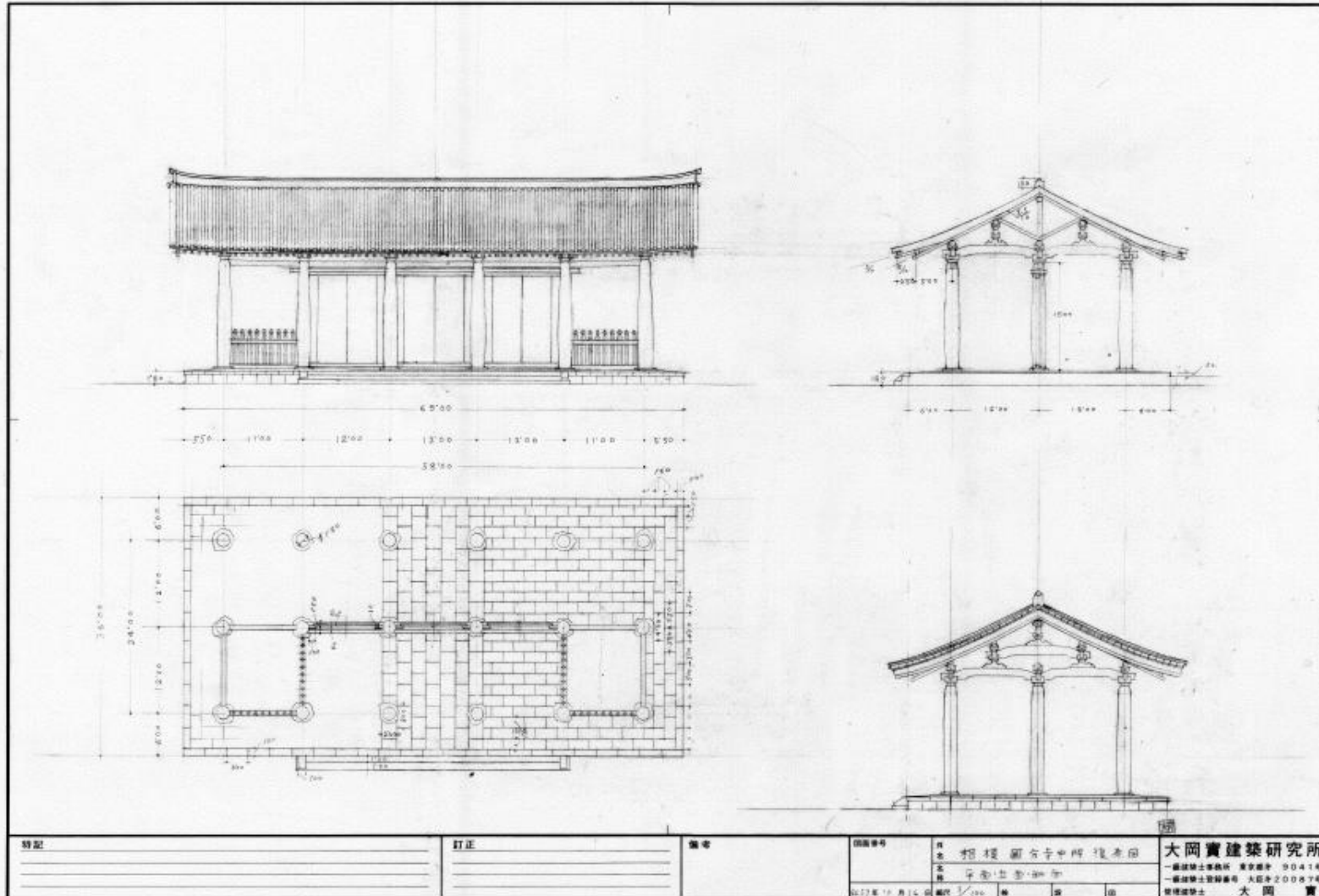


大岡實建築研究所
 一級建築士事務所 東京都 9041号
 一級建築士事務所 大岡実 20087号
 事務所 大岡実

回廊復元圖



中門復元図



特記

訂正

備考

図面番号

大岡實建築研究所

相模国分尼寺跡

ここが相模国分尼寺跡/前方の木々の辺りが金堂跡らしい/手前の道路の辺りから後ろが講堂跡になるようだ/南方向を見たところ



この辺りが金堂跡/基壇の名残りか若干地盤が高くなっている/右手に説明板が立っている



相模国分尼寺跡（金堂跡）

この寺院跡は、相模国分寺跡の北方約600メートルに位置しています。近年、寺域内の発掘調査が数次にわたって実施され、この金堂跡のほか、講堂跡と鐘楼跡の基壇の一部が確認されました。その結果、中門・金堂・講堂が南北に並び、講堂の両脇に経蔵と鐘楼がつく伽藍配置をとること、規模は相模国分寺より一回り小さいことがわかりました。また、金堂跡の確認調査では、基壇上から桁行5間・梁行4間の大規模な礎石建物跡が検出されました。

平成3年3月31日

海老名市教育委員会

南西側から金堂跡の高まりを見たところ/確認調査によると高さ1mの土壇として残り、基壇上には礎石15個が残存していたという



南東側から北西方向を見たところ/左手が金堂跡



北東側から南西方向を見たところ/前方の木々の辺りが金堂跡/現在は歴史公園として利用されている



金堂跡には庚申堂などが建っている





これが庚申堂



庚申塔が鎮座している/1666年の造立らしい



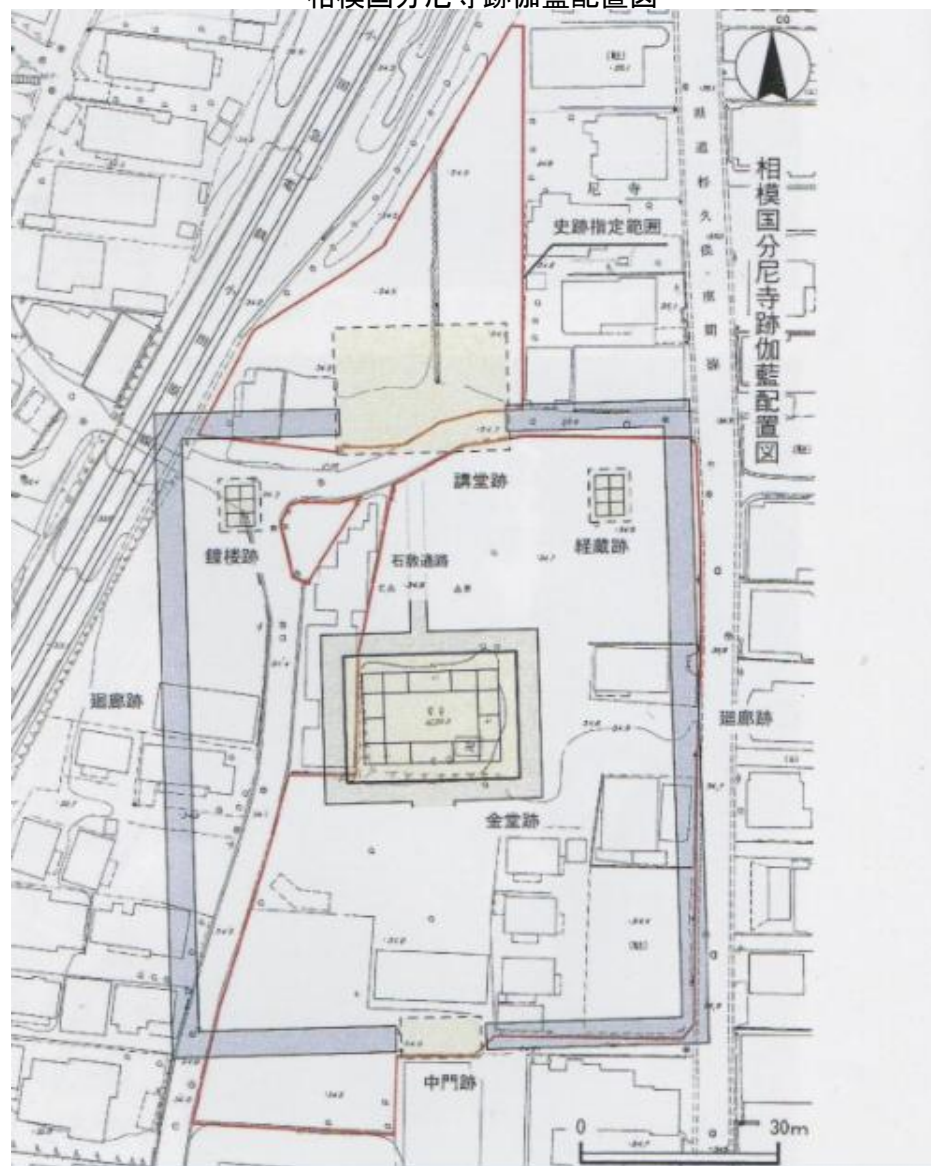
さまざまな石造物が立つ



傍に「國分尼寺金堂址」と記された標柱も立つ



相模国分尼寺跡伽藍配置図



← 伽藍内には鐘楼(左)、経藏(右)もあったようだ

国分寺

さて、ここは現在の「相模国分寺」



本堂/平成6年再建







左手の覆屋に保存されている梵鐘は正応5年(1292年)に源季頼が国分尼寺に寄進したもの/物部国光作/重要文化財



地藏堂？



海老名の大ケヤキ

さて、これは神奈川県指定天然記念物の「海老名の大ケヤキ」



神奈川県指定天然記念物

海老名の大ケヤキ

昭和二十九年三月二十九日指定

このケヤキは、かつて船つなぎ用の杭として打つたものが発芽して大きくなり、以来、人々が保護し育ててきたものと伝えられている。根回り十五・三メートル、目通り七・五メートル、樹高二十メートルに達する大木である。

ケヤキはニレ科の温帯性落葉高木で、県下でも沖積地や台地斜面などに自生しているため昔から親しまれてきた。屋敷内に植栽されることも多く、しばしばケヤキの見事な屋敷林も見かける。

もともとこのあたりでは、ケヤキ林が自然植生として栄えていた。昔の人が生活の知恵から打ちつけた杭も、ちょうどこの土地に合ったものを使ったため、現在見られるほどの見事なケヤキに生長したものと推定される。郷土を代表する木として、永く保存する必要があり、県指定天然記念物に指定したものである。

神奈川県教育委員会





相模国分寺跡 諸元

塔跡	建物：礎石建, 3間四方(36尺, 10.73m) 基壇：高さ4.5尺(1.34m), 69尺(20.56m)四方
金堂跡 講堂跡	建物：礎石建, 桁行7間(116尺, 34.5m), 梁行4間(56尺, 16.7m) 基壇：高さ3.5尺(1m), 桁側134尺(40m), 梁側104尺(31m)
僧坊跡	建物：掘立柱建(I・II期), 礎石建(III期) 桁行25間以上:81m以上, 梁行2間:6.5m 1坊:3間(30尺, 8.9m)×2間(22尺6.5m)
経蔵跡 鐘楼跡	地業範囲(推定) 桁側約15m, 梁側約11.4m
中門跡	地業範囲 桁側20~21.5m, 桁側10~10.7m
北面廊跡	礎石建, 桁行22尺(6.6m)等間
南面廊跡	礎石建, 桁行10尺(3.0m)等間, 梁行18尺(5.4m)
北方 建物跡1	掘立柱建, 桁行3間以上(30尺, 9m以上), 梁行(I期)2間(20尺, 6.0m)・(II期)3間(32尺, 9.6m)
北方 建物跡2	掘立柱建(坪掘地業), 桁行3間以上(30尺, 9m以上), 梁行2間(20尺, 6.0m)
史跡指定	大正10(1921)年3月3日付内務省告示第38号 種別：史跡 指定面積：34472.73 m ²

参考ホームページ

<http://www8.plala.or.jp/bosatsu/ebina/kokubunji.htm>

http://www.gregorius.jp/photogallery/page_36.html

http://www009.upp.so-net.ne.jp/funa-funa/2006KANAGAWA2/20061028ebina/20061028ebina_index.html

http://www7b.biglobe.ne.jp/~s_minaga/ato_sagamikoku.htm

<http://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/201446>

<http://massneko.hatenablog.com/entry/2013/11/25/121348>

<http://4travel.jp/travelogue/10774791>

<http://blogs.yahoo.co.jp/kanezane2/17831125.html>

http://ic.nul.narova-u.ac.jp/ispui/bitstream/2237/19773/1/%F5%8F%B2%E5%AD%A660_3_%F6%A2%B6%E5%8E%9F.pdf#search=%E7%9B%B8%E6%A6%A1%E5%9B%BD%E5%88%86%E5%B0%BC%E5%AF%BA%E8%B7%A1

